

妊婦の貧血と周産期障害に関する研究 (分担研究報告書)

国立岡山病院 産婦人科

藤 森 博

研究計画、並びに研究経過

妊娠時に於ける母体の貧血が母体並びに胎児、新生児、乳児に及ぼす影響について研究するため、調査表を作製し、母体については、妊娠初期より産褥1ヶ月後まで、児については、流早産並びに分晩時に於ける新生児所見、及び生後1年までの児の血液所見の追求を開始した。

次に、妊婦貧血が胎児並びに母体に及ぼす影響(早産、低体重児、SFD児発生、妊娠中毒症発生率)について近年に於ける成績と現在より15~20年前に於ける成績とを比較検討するため、昭和36年、当院に於いて出生した妊婦について統計的観察を行なった。

次に、妊娠時に於ける母体の貧血が、胎児の発育に及ぼす影響を検討するため本年は先ず、妊娠貧血ラットより生まれた胎仔の発育について動物実験を行なった。

研究結果

a) 昭和36年当時に於ける妊婦貧血と早産、SFD児、低体重児(2,500g以下)並びに妊娠中毒症発生との関連。

昭和36年当時、本院にて出生した496例について、統計的検討を行なうと、満38週未満の早産の発生率は、非貧血妊婦群の11.6%に比し、貧血群では25.0%、SFD児発生率は7.4%に比し20.5%、低体重児発生率は8.6%に比し23.5%と、いずれも貧血妊婦群に有意の発生率の増加がみられた。

b) 昭和52年度に於ける妊娠初期、並びに中期(妊娠7ヶ月)に於ける妊婦Hb値と早産、SFD児、低体重児、妊娠中毒症発生並びに、新生児Apgar Scoreとの関連をみると妊娠初期の妊婦Hb値11g/dl未満の貧血群ではSFDが20~30%の危険率で有意に発生し、特にHb値10.0~10.9g/dlの群間では10~20%の危険率でSFD発生の因果関係が考慮される外は提起された項目では、妊婦貧血と新生児との間には有意差はみとめられなかった。

妊娠7ヶ月に於ける妊婦Hb値と早産、SFD児、低体重児発生との関連をみると、早産との関連においてのみ貧血妊婦群にややその発生率が高い傾向がみられたが、有意とは云えなかった。

SFD児、低体重児、妊娠中毒症、Apgar Scoreとの関連は、全く認められなかった。

c) 妊娠ラット尾血管からの脱血により、妊婦貧血のモデルとして実験的に妊娠貧血ラットを作製した。妊娠21日目の胎仔体重との関連では対照群に比し、実験群では、明らかにSFDの傾向が認められた。又胎仔造血機能を調べるため肝、脾、骨髓につき比較すると対照群に比べて実験群では、形態学的に造血機能は亢進状態であった。然し骨髓での造血は両群とも未完成であり、差は認められなかった。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究計画,並びに研究経過

妊娠時に於ける母体の貧血が母体並びに胎児,新生児,乳児に及ぼす影響について研究するため,調査表を作製し,母体については,妊娠初期より産褥 1 ヶ月後まで,児については,流早産並びに分晩時に於ける新生児所見,及び生後 1 年までの児の血液所見の追求を開始した。